

大学との連携 事務局

博物館の大事な仕事のひとつとして、教育指導活動があります。将来、博物館で働きたい人など、学芸員を目指す人のために、博物館実習を受け入れ、教育することも重要な仕事なのです。

静岡大学理学部では、平成 19 年度より、学芸員養成コースを作り、40 名ほどの学生が受講しています。学芸員コースでは、その期間中に、最低 1 週間、博物館か博物館相当施設で、実習を行う必要があります。しかしながら、県内に博物館実習を受け入れてくれる施設は少なく、静岡大学から、清水区辻町の静岡県自然学習資料保存事業所（今年度から「静岡県自然学習資料センター」と改名）を博物館相当施設として大学が認定するので、そこで学生を受け入れてくれないかという打診が、昨年ありました。しかしながら、この施設は、静岡県自然学習資料を保存する事業所であり、県から委託されて、私たちが自然の標本などを収集・整理・保管を実施している所であり、県の使用許可が必要となります。

そこで、昨年来、県の企画部、静岡大学、静岡県立大学、当 NPO の間で、「大学との連携」の必要性や意義を検討してきました。そして今回、県企画部、静岡大学、当 NPO の 3 者で、博物館実習に関する協定を結び、県が場所を提供して、NPO 自然博ネットが実習の指導をするということで、博物館実習を受け入れて進めていくこととなりました。さらに、大学におい

て実施している博物館資料論の授業の一部に、当 NPO から講師を派遣して欲しい旨の依頼もあり、現在検討中です。

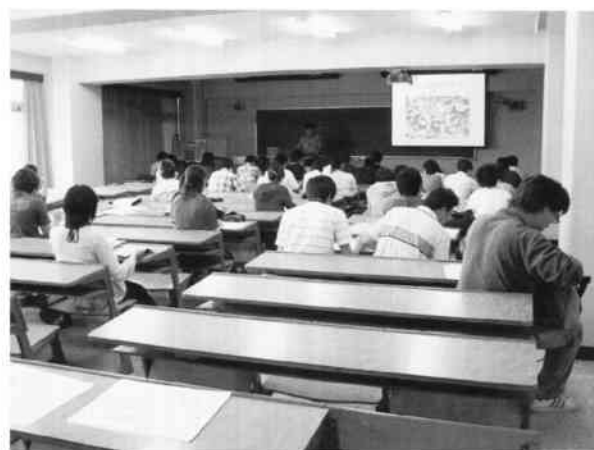
別途、東海大学海洋学部からは、大学内で実施する、財団法人自然環境研究センター主催の生物分類技能検定 3 級試験のための事前講義を依頼されました。植物、昆虫、海水魚、淡水魚、両生爬虫類とその他、鳥類、哺乳類の各分野に 6 人の講師を NPO 自然博ネットから派遣して、現在講義を行っています。試験日は 6 月下旬で、この「自然史しずおか」が発行された後ですので、試験結果は判りませんが、合格率が平均よりずっとアップすることを、期待しています。

大学には、専門的研究をする教員やスタッフが多く、博物館と大学が協同すれば、多くの知識や研究成果が得られるとともに、学生や大学の外の一般の人たちのための教育についても、お互いに有益な研究や事業がたくさんできると思います。今回の博物館実習や生物分類検定のための講義のように、大学と NPO 自然博ネットがお互いに協力しながら、事業を展開していくことも、静岡県における自然史博物館設立へ向けての第一歩になるはずです。

自然史博物館本体の設立へ向けての歩みは、現状ではまだまだ進んでいませんが、実質的には、NPO 自然博ネットは博物館としてすべきことを、着実に進めていっています。



静岡県自然学習資料センター研修室



生物分類技能検定 3 級試験の事前講義

総会記念講演
「これからの自然博物館はどのようにあるべきか」

小澤 智生（サイバー大学 世界遺産学部 教授）

編著 延原尊美



小澤智生教授



平成 20 年 4 月 20 日（日）午後 1 時より 2 時 30 分まで、静岡県自然学習資料保存事業室 3 階において、総会記念講演会が行われました。この要旨は、その内容を事務局で要約したものです。講師の小澤智生氏は、九州大学理学部、東京大学理学部、兵庫教育大学と歴任され、平成 19 年名古屋大学理学部を定年退職されました。その間、古生物学、地質学、系統進化学など多方面の自然史科学分野で多くの業績を残され、兵庫県立人と自然の博物館の基本構想にも委員として携わっておられました。講演では、自然史科学のおもしろさを語られると同時に、自然博物館の新しい方向性について大いに語っていただきました。

進化をつづける欧米の自然史博物館

自然史博物館の発祥の地は、18 世紀後半のヨーロッパです。大英自然史博物館は 1753 年に、フランス国立自然史博物館は 1793 年にその産声をあげています。「学芸員が中心となって自然史資料を収集し、研究・教育活動を行う」といった、自然史博物館のあるべき姿は、日本の江戸時代に、欧米ではすでに確立していたということになります。

そのような伝統的な欧米の自然史博物館も現状を訪ねてみると、先鋭的に大きく変貌を

遂げています。例えば、大英自然史博物館では、セントラルラボ（中央研究室）が整備され、DNA シーケンサーが 4 台も稼働して、最新の研究成果が生み出されています。この意味で、自然史博物館は、一大研究機関としても進化しつづけています。また、社会教育的な機能の面でも、世界的な研究者が、訪れた来館者に対して、定期的に研究内容を紹介するなど、新しい取り組みがなされています。

日本の自然系博物館の特色

日本における自然系博物館の誕生は、国立科学博物館の前身である東京科学博物館（1931 年）にまでさかのぼります。ただし、国立科学博物館は、科学技術までを対象とした総合的な科学博物館であり、純粋な自然史博物館とは少し異なります。

日本では、純粋な意味での自然史博物館は、むしろ県立や市立のレベルで、地方に花開いていきました。斉藤報恩会自然史博物館（1933 年）、大阪市立自然史博物館（1958 年）、埼玉県立自然史博物館（1981 年）、和歌山県立自然史博物館（1982 年）、豊橋市立自然史博物館（1988 年）、群馬県立自然史博物館（1996 年）など、県立や市立の博物館が、日本の自然史の研究・教育に果たしている役割は大きいと

いえます。とくに、地域の自然の特色を打ち出したユニークな博物館が活発です。秋吉台科学博物館（1959年）は、国際的に重要な研究出版物を出していますし、滋賀県立琵琶湖博物館（1966年）では水環境をめぐる国際的なシンポジウムも開催しています。福井県立恐竜博物館（2000年）は、日本のみならずアジアの恐竜研究センターとしての機能をめざしています。

県立 市立の博物館は「箱モノ行政」というイメージで取り上げられることがあります。開館当初は入館者数が多いが、入館者数が激減してゆくというケースです。このような博物館の場合、研究を行える学芸員がいなかったり、そのための予算や組織が整備されていなかったり、展示や情報が更新されないままとなっている状況が多いように思います。一方で、瑞浪市化石博物館（1974年）のように、地域の自然史資料をベースに、学芸員が研究 教育普及活動を行い、学術出版物も定期的に出しつつ、例年コンスタントに5万人前後の入館者数を維持している博物館もあります。地域の自然史資料をベースにその特色をうまく生かし、それを住民と共有・発展させることが、成功している日本の博物館の重要な特色といえます。

新しいスタイルの自然史博物館

近年、新しい志向性をもった自然史博物館が次々に誕生しています。千葉県立中央博物館（1989年）は、房総半島という地域の自然誌を軸に、分館や生態園を併設し、ネットワーク的に施設を充実させています。ミュージアムパーク茨城自然博物館（1994年）では、インターネットの活用を積極的にとっています。兵庫県立人と自然の博物館（1992年）では、「自然」だけでなく「人と自然」の関わり（共生）にも視野を広げています。また、学芸員は県立姫路工業大学の教員を兼任しており、人材的・組織的な側面からも研究機能の充実を図れるシステムとしています。

自然と人間との「共生」をテーマとするスタイルは、他の博物館でも目立っています。他分野の博物館をも巻き込みながら、総合博物館として発展的にリニューアルされているケースもあり、今後の博物館のスタイルとし

て注目されます。例えば、北九州市立いのちのたび博物館は、既存の市立歴史博物館、自然史博物館、考古博物館が統合されて、2002年に開館しました。沖縄県立博物館・美術館（2007年）は、沖縄の自然史、考古、歴史、民族および美術工芸までをも対象とし、県内博物館の中核となる役割を担う計画です。

これからの自然系博物館

最後に、これまでの歴史や最近の新しい動向を見据えた上で、これからの自然系博物館のあり方について、論点を示します。

1) 「自然」だけでなく「人」との関わりも大切に。「共生」はこれからの将来、欠かせないテーマです。「自然史博物館」だけが単独で存在するのではなく、他分野の博物館と連携することで、相乗効果が計れます。「徳島県文化の森」のように、博物館、美術館、図書館、自然公園が集合して、多様な県民のニーズに応えられる憩いの場を創り出している例もあります。静岡県でも、これまでの施設を利用リニューアルすることで、県・道州レベルでの拠点をめざすことが現実的な戦略として重要ではないかと思えます。

2) 住民が創る住民のための参加型施設。萩博物館と連携した「NPO 萩まちじゅう博物館」では、市民が参加して、自然の情報を集めています。例えば、打ち上げの貝の採集記録を住民参加で広範に集めて、地球温暖化に伴う生物相の変化のモニタリングを活発に行っています。住民とともに環境を調べ、データや情報を発信していく施設としても、県民にとって博物館は拠点となります。

3) インターネットの活用。ベースは実物の資料なのですが、住民参加型の活動のツールとしても、博物館の情報を市民に広範に活用してもらうためのツールとしても、ネットワークをいかに博物館の機能としてうまく活かすかがポイントになると思えます。

最後になりましたが、静岡県はこれだけ自然豊かな土地で、産業も活発です。他県からみても、魅力的な自然史博物館ができないはずはない場所です。人と自然の共生を学び、それを楽しめる総合的な博物館の拠点ができることを切に願います。（文責 延原尊美）

三島湧水地めぐり

及川 忠広



楽寿園内の溶岩を観察



源兵川の水質を調べる

2008年3月9日、「三島の湧水めぐり」のテーマで、三島市街から清水町の柿田川にかけての水辺の観察会を実施しました。

近年、三島市は「街中がせせらぎ事業」の名前で、三島市街を流れる川辺を散策路、観光の目玉とする整備事業を繰り広げています。かつて、東海でも指折りの水郷として、湧水とせせらぎとに恵まれていた三島でしたが、昭和30年代以降、相次ぐ生活の近代化、工業化に伴い、水量も激減。そればかりか水質の悪化もたどってしまいました。憂慮した市民や各活動団体、そして市が改革に乗り出し、かつての水郷の町を取り戻そうと様々な取り組みを開始しました。

観察は、三島駅前の市立公園、楽寿園を起点とし、白滝公園、源兵衛川、四ノ宮川、ミシマバイカモの里、水の苑緑地公園、境川・清住緑地、柿田川……と、南下と共に下流域へ向けて歩く行程となりました。

楽寿園

明治期に、小松宮別邸として造営され、戦後に市民公園として三島市が管理することとなりました。園内各所にはかつての富士山の噴火による溶岩流のあとが生々しく残されており、粘性の高い溶岩が流れた様子が確認できる縄状溶岩も見られます。また、ガスを内包したためにドーム状に盛り上がった溶岩が作り上げた塚も見られます。

別邸であった楽寿館は、自然池泉であった小浜池のほとりに建てられています。当時の屋敷からは湧水によってたたえられた池の景観が楽しめたはずですが、現在は各地で地下水の使用もあってか、池の水は絶えて久しく、枯山水のような景観となってしまいました。かつては小浜池周辺各所から大量の湧水があり、そこから瀬となって三島市街へ向けてとうとうと冷たい清水が流れ出していました。筆者の子ども頃……昭和50年代には水は流れており、池も満水だった時期があったと記憶しています。

白滝公園

大きなニシの木が生えており、梢ではシジユウカウが見られました。この公園も以前は湧水に恵まれた公園でした。滞留して盛り上がった溶岩塚も見られます。しかも、その溶岩塚が割れ、二次的に再び流れ出した溶岩の跡も認められるそうです。また、御殿場泥流の堆積した跡も見られたそうですが、現在は、石垣が造成されたため、観察はしにくくなっています。

ここでは、地元の方に昔の写真を見せていただきました。今よりも広く感じられる桜川で遊ぶ子どもたちの姿が写っていました。

至近の浅間神社にも湧水の跡があり、昔は泉で神事の際の禊ぎも行われていたそうです。

源兵衛川

都市化により、水量も減り、水質の悪化もた



源兵衛川で遭遇したカワセミ



柿田川湧水のしくみを話す案内者工藤氏

どりでしたが、現在は長泉・三島にある化学工場からの放流水もあって、環境も持ち直しつつあるそうです。魚も見られ、市民ボランティアによるホタルの放流も行われています。また、両岸には民家が並んでいるため、庭木を渡るメジロの姿も見られます。運が良ければ、カワセミと遭遇することもできます。ほぼ、三島市の中心市街地とっていい場所ですが、カワセミが見られるのは驚きです。川中を飛び石のような遊歩道が整備されているため、市民の散策の道としても親しまれています。

ミシマバイカモの里

楽寿園の小浜池で発見されたものが記載され、梅に似た花を咲かせる藻であるため、この名があります。水温が低く、水質の良い環境でしか育たないとのこと。ミシマバイカモの里は、そんな本種のための培養池で、ボランティアによる管理が行われています。観察時には白い小さな花を咲かせており、参加者も盛んに撮影していました。

水の苑緑地公園

源兵衛川のほとりにある公園で、二またに分かれた川に挟まれた場所です。木立も多く、多くの野鳥も身近に見られます。この公園では、ジョウビタキ、アオジ、ツグミ、カルガモ、キセキレイなども見られ、カワセミも目撃することができました。何度か水面に飛び込み、魚を狙う様子も見ることができました。

清住緑地

清水町との堺に広がる緑地です。散策路、ウ

ッドデッキも設けられていますが、せせらぎや土手などの自然を生かし、人の立ち入りを制限した野鳥のためのサンクチュアリも設定されています。周囲より落ちくぼんだ地形となるため、近くの民家の際では露頭が観察できます。ここでは、噴火にともなって発生した、泥流などにより運ばれてきた堆積物の地層が見られました。緑地にも何カ所か湧水があります。周囲の草むらでは、ツクシやイヌフグリなども見られました。

柿田川

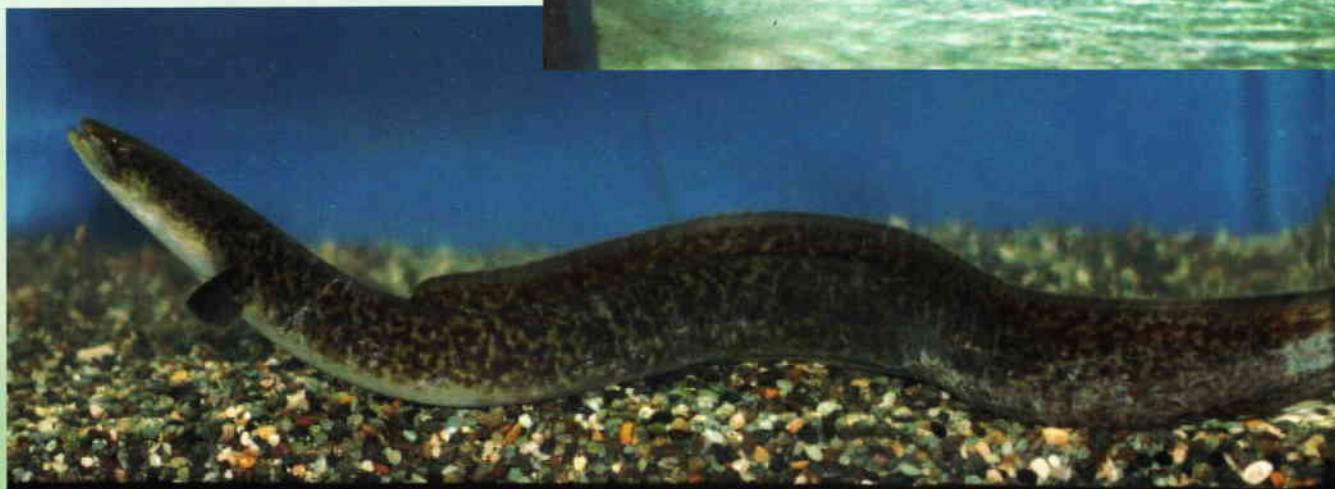
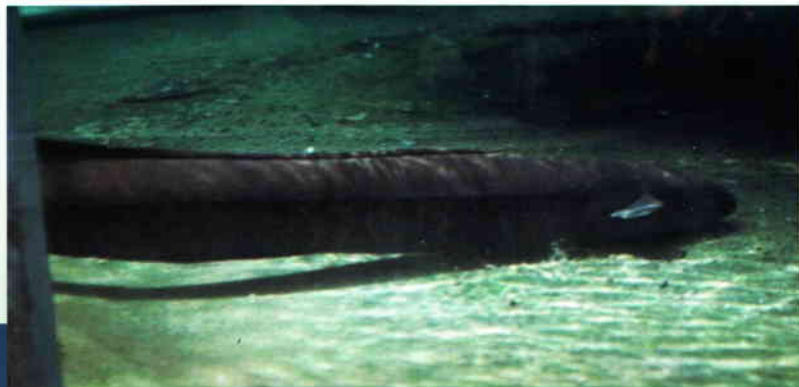
新富士溶岩の中をくぐり抜けた地下水が、十数カ所の泉から噴出し、そのまま河川となっています。水質は最上級。近隣市町の企業、農業に広く水を供給しています。かつては、この泉全体が紡績工場の敷地内にあり、取水 排水が行われていたそうです。泉を囲む円形、方形の建造物や、川の中に沈んでいるパイプなどは当時の名残です。現在は公共水源でもあり、自然の記念物として各種団体から保護も受けています。この川の存在は、地質の構造と地下水との関係を考えるには良い教材とも思えます。

今回は湧水を巡る観察会でしたが、地下水の湧出とは、水源と地質構造が複雑にからみあった環境が存在してこそその現象です。そうした水辺環境をよりどころとする多くの植物や生き物も存在しますが、人間の開発などにより、その環境が変わるリスクも秘めています。単純に表土をコンクリートやアスファルトで覆うだけで、雨水の地下への浸透が妨げられ、それが広い地域で行われれば一帯での地下水の減少にもなりえます。

静岡県の水生生物 (10)

オオウナギ

板井 隆彦



写真は2004年6月4日に西伊豆の松崎町石部の小流でとれたオオウナギである。ただし、とれたときはごく小さい幼ウナギであった。飼育期間は1年10ヶ月。静岡淡水魚研究会の小林正明氏が採集・飼育し、写真は筆者がそれを譲り受けて、標本として固定する前に撮影したものである。大きくて60cm水槽に収まらず、魚は曲がりくねってしまった。

オオウナギは、一般にはしばしば間違えられるが、単なる大きなウナギではない。オオウナギは体が太く、体側にまだら模様をもつ。種小名のマルモラータや地方名のゴマウナギはいずれもこの体側の模様にならむ。ウナギとの体型の違いは魚体が大きくなればなるほどはっきりする。また長さも大きくなり、全長2メートルをこえる個体もまれでなく、筆者は鹿児島県でそういった個体を実見したが、まるで丸太のような太さだった。

オオウナギは熱帯系のウナギで、インド洋や太平洋の熱帯から亜熱帯に分布し、日本列島では奄美大島以南に多く、本州では黒潮の届く千葉県まで記録がある。静岡ではほぼ全県に分布すると思われるが、伊豆半島や御前崎地域で黒潮の大きい影響をうける周辺の河川から多く見つかる。

ウナギと同様に黒潮に乗って幼生であるレプトケファルスが河口にたどり着き、変態して河川を溯上するわけであるが、その時期は、菊川での調査や聞き取りからすると、ウナギとずいぶん違う。菊川では8月頃に溯上が始まるようで、ウナギの溯上が12月頃からであることと比べると4ヶ月も早い。

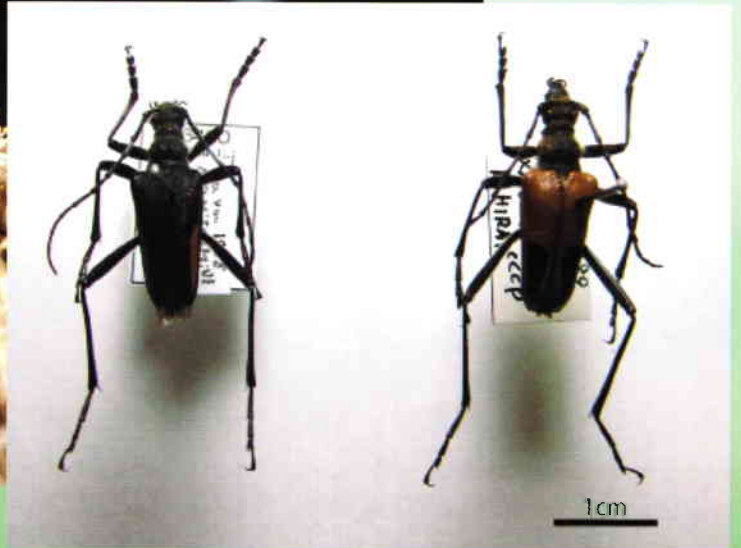
川に入ったオオウナギの溯河性はウナギよりも強く、ウナギが下流域で多く見られるのに比べて上流域で見つかることが多い。25年ほど前に静岡市の小坂川の最上流域で見つかったオオウナギは当時の新聞を賑わせたが、市内の児童図書館でしばらく展示されていた。筆者は図書館員から写真での同定を依頼されたのであるが、全長90cmもあった。

かつては安倍川などでも、出水後に下流の浅瀬でのたくっているこのオオウナギがよく見つかったものであるが、近年はそういったことをあまり聞かなくなった。オオウナギが絶滅寸前になったのではあるまい。おそらく洪水後にまで、川のぞきをするような川好き、魚好きが絶滅寸前になっているのであろう。

静岡県の昆虫 (7)

キベリカタビロハナカミキリ

平井 克男



キベリカタビロ
ハナカミキリ

フタモンカタビロ
ハナカミキリ

キベリカタビロハナカミキリは日本特産種のカミキリムシで、本州中央部のブナ帯から亜高山帯にかけて生息しています。数年前、九州でも発見されました。北杜夫著『どくどくまんぼう昆虫記』の中に登場する種で知られています。

私のこれまでの甲虫採集の中で、特に20歳代から30歳代にかけてカミキリムシに熱中していた頃、本種に夢中になったことがあります。その姿、形のがっしりとした重量感、足の長いスマートさが魅力的でした。和名のように肩が広く、エリトラ(甲虫類の上翅)が黒色で縁が黄褐色をしているのが基本型ですが、大井川、安倍川流域では全体が黄褐色となる種も現れます。8月上旬ノリウツギやリョウブの花に集まり、また立ち枯れの古木や木材を集積した土場によく見られました。捕虫網に本種が入ったとたん、他のカミキリムシと違ってズシンとその重さを感じられたものでした。静岡県では大井川上流域、天竜川上流域、安倍川上流域、富士山で採集されています。

私の経験では、安倍川流域で、梅ヶ島温泉から八紘嶺へのきつい登りを暑い8月上旬に登り、標高1800m前後の開けた傾斜地に咲いているノリウツギ、リョウブの花上より、オオヨツスジハナカミキリ、コヨツスジハナカミキリ、ヒメヨツスジハナカミキリ、ジユウシチホシハナムグリなどとともに採集できたのが忘れられません。三ツ峰周辺もかつてブナの大木が広い範囲に群生し、非常に恵まれた環境の場所でしたが、大規模に伐採され植林地となってしまったことは、かえすがえすも残念なことです。

キベリカタビロハナカミキリが含まれる*Pachyta*属の中にシベリア、旧北区に棲息するフタモンカタビロハナカミキリがいます。私がロシアのハバロフスク市郊外のヘフツィール山脈を訪れた時、シシウド花上に本種を見つけ、飛翔のしかた、姿形がキベリカタビロハナカミキリとよく似ていて、興奮して採集したことを思い出します。

大札山・山犬段・蕎麦粒山の自然観察会報告

横山謙二



山犬段駐車場で説明を聞く



蕎麦粒山への山道

5月18日、静岡駅を出発したころは、温かく晴れて今日も一日いい天気恵まれると思っ
ていましたが、大札山付近では、薄く霧がかかり、少し肌寒く感じました。

大札山から山犬段にかけての林道は、舗装されてなく、あちらこちらに崩壊・地滑りの跡が見られる非常に急傾斜地に造られた道です。晴れていれば、眺めが良かったことでしょう。そんな道沿いですが、山の斜面の縁には時折見られる薄紫色のトウゴクミツバツツジの花が咲いているのが見られました。また、道沿いの切土の露頭には、四万十帯寸又川層群の砂泥互層の褶曲構造が見られ楽しめました。

山犬段駐車場（標高1404m）につき、ここから歩いて、シロヤシオが見られる蕎麦粒山（標高1627m）の山頂付近に向かいました。山道は、ブナ林の中の緩やかな尾根沿いの道です。蕎麦粒山の名の由来は、ブナの実が蕎麦の実と似ているところから、付いたそうです。その道を登っていくと、姿は見えませんでした。コマドリやコガラ、ウグイス、ジユウイチ、ミソサザイなどの野鳥の囀りが聞こえにぎやかでした。また、植物は、ウラジロモミヤオオカメノキ、テツカエデ、ナナカマドなどが見られました。中でも、山頂近くで見られた、見落としてしまいそうな程小さく、かわいい花を咲かせていたヒメミヤマスマシレが印象的でした。



ヒメミヤマスマシレ

さて、今回の観察会のメインのシロヤシオですが、まだつぼみの状態で、残念ながら咲いているところは見られませんでした。5月の連休明けに寒い日が続いた影響のようです。1週間程後であれば、見られたようです。

山頂に着き、昼食をとり、しばらく散策していると、ゴジュウカラが姿を見せてくれました。その後、鳥の囀りを聞きながら、来た道をもどりました。

山犬段駐車場まで下ると、まだ時間に余裕があるので、動植物の観察や地層の観察など各自で、興味のあるものをしばらく観察しました。

今回の自然観察会では、シロヤシオが咲いているのは見られませんでした。来年機会があれば、見に行きたいと思います。

静岡県自然学習資料センター

横山謙二

平成 15 年度から県企画部より受託し、貴重な自然史標本を収集してきた『静岡県自然学習資料保存事業室』ですが、名称を今年度より『静岡県自然学習資料センター』に改めることになりました。また改名だけでなく、収蔵庫も拡張しました。

植物標本室は、2 階左の奥の中部健康福祉センター庵原分庁舎が使用していた部屋に移動し、今までの 3 倍に拡張しました。また、昆虫標本室は、3 階左奥の 2 部屋に移動し、今までの 2 倍に拡張しました。これまで、昆虫標本室、植物標本室として使用していた部屋は、レクチャー・実習室と脊椎動物標本室として使用する予定です。

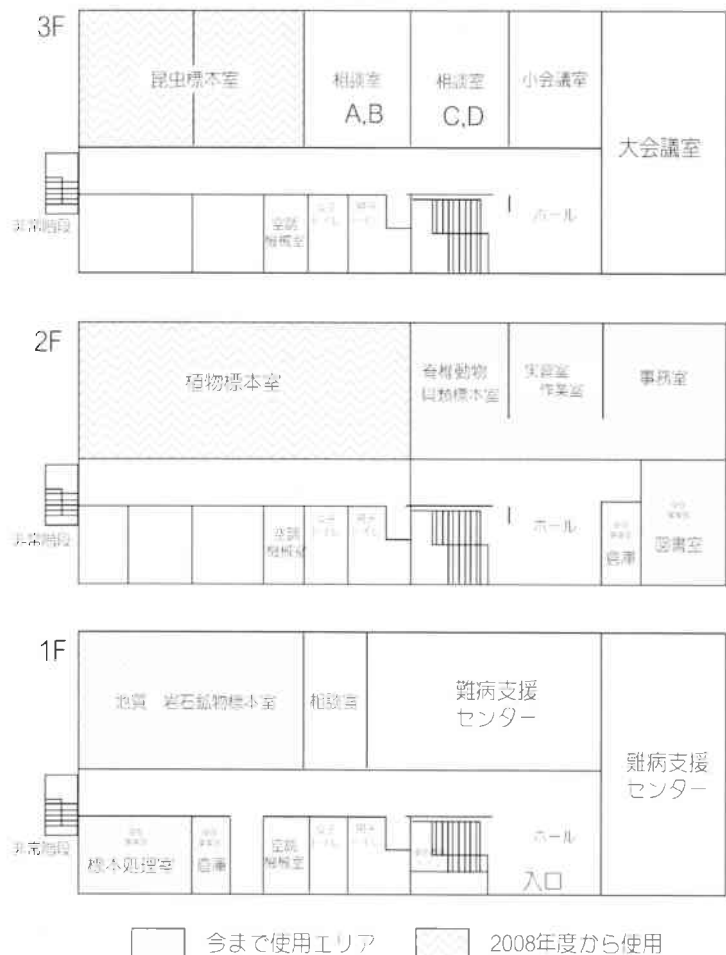
標本室の拡張に伴い、今年度は志村義雄氏植物コレクション（5,000 点）、杉野孝雄氏植物コレクション（60,000 点）、寺田 徹氏貝類コレクション（15,000 点）を受入れる予定です。また、今年度から、魚類液浸標本の受け入れが決まり、板井隆彦氏魚類コレクション（10,000 点）を受入れることになりました。今年度の事業は、こうして新たに搬入される標本の受入台帳作成の他、昨年度からの継続作業の湯浅保雄氏植物コレクションの整理作業、高橋真弓氏昆虫コレクション 2007 年度追加分の受入台帳作成・仮評価作業、大橋昭彦氏化石・鉱物コレクションの仮評価作業、小澤智生氏化石コレクションの受入台帳作成、土 隆一氏化石コレクションの受入台帳作成などの作業を行う予定です。

県企画部より自然学習資料保存事業を受託し続け今年で 5 年目を迎え、ようやく 160,000 点程の標本数になりました。これからも、自然史標本を収集し続け、大切に保管するとともに、これら標本を研究・教育に活用することも考えて事業を行っていきたいと思います。



新しい植物標本室

静岡県自然学習資料センター見取り図



昆虫よりも無セキツイ動物観察会 になった黒川観察会

清 邦彦

5月11日の日曜日、興津川上流のやすらぎの森で静岡昆虫同好会との共催での自然観察会は朝からの雨。多くの方はこれでは中止だと思ったようで、参加者は2組5名だけ。指導者の方は各分野から8名というげいたくな観察会になった。参加者の方も自然観察の指導をしている方と高校生物部なので、お互いに勉強し合った研修みたいな観察会になった。

雨上がりとあって、出てきたのは30cmもあるうかという大きなクガビル（陸蛭）が2匹、濡れた路上を活発にエサを探してはっている。そしてこれまた大きなフトミミズも。さらにはそのクガビルがフトミミズを襲って横から食いついて2つ折りにして飲み込もうとしている現場（写真）まで観察。気持ちのいいものではないが、珍しいものを見ることができた。帰りがけに再び現場を通ると、さすがに食べ切れなかったのが、いくつにも切断されたミミズが散らばっていた。他に死んだイモリ、サワガニ、大きなカタツムリなど、午前中は昆虫観察会のはずだったのだが、環形動物観察会、無セキツイ動物観察会になってしまった。

それでも昆虫ではシダの葉を食草とするイカリモンガの幼虫、枝に擬態したナナフシの幼虫、クサマオの葉で作ったアカタテハの幼虫の巣、カイコの野生種のクワゴ、鳥に食べられた



アカタテハの幼虫の巣

のが、アケビコノハの羽、危険を感じるとからだを左右に振って齧すフクラスズメの幼虫、それにオトシブミの葉を巻いた巣など、面白いものを多く見つけた。

昼頃には気温も上がり、キャンプ場のツツジの花にはオナガアゲハやカラスアゲハなど盛んに訪れていた。

午後は水生生物の観察の計画であったが、参加者が少ないこともあって昼過ぎに解散となった。



ミミズを襲うクガビル



アケビコノハ（蛾）のはね

土 隆一氏 貝化石コレクション

延原 尊美

元静岡大学理学部教授の土 隆一氏より、日本の第三紀鮮新世・第四紀の貝化石を中心としたコレクションをご寄贈いただきました。第三紀鮮新世・第四紀という時代は、約500万年前から現在までにあたり、わたしたちをとりまく日本の動植物が、どのように進化してきたのかを調べる上でたいへん重要な時代です。とくに海に住む貝類は化石記録もたいへん豊富で、日本にのみ分布する種(日本固有種)の進化や環境の時代変化を詳しく復元することができます。

土 隆一氏は、1963年～1992年まで静岡大学で教鞭をとられましたが、その間、東海地方の地質、古生物の研究を中心に、太平洋地域にも広く眼を向けられ、国際地質対比計画(IGCP)のプロジェクトリーダーとしても活躍されました。太平洋をとりまくさまざまな地域の地層を対比することで、第三紀～第四紀にかけて東海地域で起こった生物群の変化が、地球レベルで起きた温暖化や寒冷化の気候変動と関係があることを示しました。

静岡県掛川地域の貝化石群についての研究では、時代とともに日本固有種の形態が変化していく現象や南方系種の栄枯盛衰をもとに、掛川地域の地層の時代区分(湯日階、遠江階、周智階、結縁寺階、油山寺階)を提唱しました。この時代区分は、太平洋の第三紀の地層を対比する上で、日本におけるスタンダードの一つとなり、国際的な地質時代区分の表に掲載されたこともあります。

ご寄贈いただいた貝化石コレクションには、その時代区分の基礎となった掛川地域の貝化石群の資料が、全て網羅されています。資料は、産地ごとに代表的な貝化石がセットとして揃えられていますが、掛川地域の第三紀層の貝化石だけでも、200セット以上に及びます。土コレクションは、高度経済成長期の開発にともない露出した地層からの資料が含まれていますが、それらの露頭は現在ほとんど消滅しており



掛川地域第三紀層のさまざまな貝化石

ますので、土コレクションは二度と手に入れることのできない貴重な資料であるといえます。

土コレクションには、掛川の貝化石群とほぼ同時代の、他の地域の貝化石群も数多く含まれています。静岡だけではなく、北海道、青森、秋田、金沢、千葉、神奈川、高知、宮崎、沖縄と、ほぼ日本全国の主要な産地の貝化石がセットになって整理されています。それらは、全国の第三紀層の時代対比の基礎資料となったという価値だけでなく、当時の日本列島の環境や生物地理、海流系など、これからも多くの情報を得ることができる一級の資料であるといえます。その他にも、南部フォッサマグナ地域や伊豆半島の第三紀層、静岡県および愛知県の第四紀層など、南関東～東海地域にかけての自然史を語るうえでははずせない資料が数多くあります。

土コレクションは、上に述べた内容の標本群の蓄積が600セットにも及んでいます。約500万年前～現在にかけて静岡県および日本で起きた環境変動や生物進化を、今後、研究したり、学習したりする上で、決して散逸させてはならない標本群でした。この度、セットで静岡県にご寄贈いただけたことは、県にとってかけがえない自然史の財産となります。